

○ 自由報告Ⅲ

コミュニテイ・アイデンティテイに関する若干の考察

木下謙治（山口大学）

コミュニテイの概念は混乱しているが、ここではさしあたり、概念それ自体の論議はしない。いちあり、ここでは、生活連関上の機能的な諸指標によってせよ、感情的あるいは主観的な諸指標によ

ってにせよ、ないしは双方の諸指標からにせよ、相対的に區別しうる生活連関の領域というほどの意味で、コミュニティという語を用いている。ふつう、地域とか地域社会とかいわれている用語法と、ほぼ同じである。コミュニティ・アイデンティティとは、コミュニティの識別とでもいうべきものであり、その用語法は、W. J. Hagg & C. L. Polse "Trade Patterns and Community Identity", R. S. Vol 36 (1971) pp 42 ~ 51 によつてゐる。

一般的にいえば、従来、コミュニティ・アイデンティティにかかわる指標は、客観的に実在する機能的な生活連関のなかに求められてきた。その際、重視されてきた指標は、アメリカの農村社会学においては、たとえば、O. J. Galpin から J. H. Koeb に至るまで、ほぼ商圏のごときのものであったといえよう。もちろん、かかる実在的、機能的な指標の重要性を否定するわけではない。

しかし、人々のコミュニティに対するパースペクティブ、つまり主観的な地域の識別は、機能的な生活連関としてのコミュニティと十分に複合するものではない。むしろ、この側面に着目すれば、コミュニティ・アイデンティティとは、機能的な生活連関よりも非経済的・感情的な生活連関に、機能的な集団よりも象徴的な集団に、より深い関係があるとする見地がある。(たとえば、Haga & Polse, Ibid. P. A. Munch & R. B. Campbell "Interaction and Collective Identification in Rural Locality" R. S. Vol 28 (1963), pp 18-34 など、こうした Identity の著者は J. H. Koeb などとされる)。

本報告においては、こうした、コミュニティ・アイデンティティ研究の方向にそつて、地方都市山口市において実施した実態調査の報告をおこなう。調査対象地域は、山口市の中から、山口市の都市的發展とともに、段階的に変化してきている三地域、すなわち、農村の地域、農村の中に住宅地がいくつんできている地域、もともと農村的地域であったものが住宅地となった地域などをとりあげ、コミュニティ・アイデンティティと、それにかかわると思われる若干の要因との連関関係を分析した。なお調査対象者は世帯主である。

識別された地域は、地域的な相違にかかわらず、三地域とも、部落・町内会を中心とする小範域のそれが多く、山口市全体という広い領域のそれは、少なかつた。三地域における、コミュニティ・アイデンティティのあらわれ方の、こうした共通性が、すでに、アイデンティティが機能的連関以外の要因に依存していることを示しているが、この点に關しての若干の分析をおこなう。

なお、コミュニティ・アイデンティティの、かかる側面からの研究は、地域再編成が急速にすすんでいる今日の状況下では、一つの重要な意味をもちうるのではないかと思う。種々の地域計画、とくに、末端の小地域に關する計画には、この種の研究が整備されて、立案の際考慮されるべきではないかと思われる。ただし、今回の報告では、調査や分析の手法に種々問題があり、きわめて未整備なものとなっている点をおことわりしておきたい。